

その縁起とはなんたるかという、相依相待であります。先程の70億人の人間の万般の行動、これがすべて関連しあっているということでもあります。主体的と思える行動も、すべてほかの何か影響を受けざるをえないということでもあります。すなわち、この世の中では、主体的な行動はないということです。

われわれが、毎日、自分の意志で行動していると思っているが、それはさにあらず、空なのであります。縁起で行動しているだけのことです。殺人者から人を救うのか、そこで拱手傍観して逃げるのか、それは縁起で決まる。すべてこだわりなく受け容れましょうということです。



(天台宗寺門派実相院の中庭：冬)

このような考え方は、世界の改革の気運に欠け、ただただ怠惰に陥る厭世的思想であると批判もあります。人間の積極果敢な行動を阻害するというわけです。

しかし、天台は一方で、この世の中には、おいしい物がいっぱいあるし、うまい酒もある、綺麗なねーちゃんもおるし、愛すべき大事な家族もあることも当然認めます。

こういう何か、主観的に知覚し感覚的に把握できるものを現実世界として我々は認識しながら生きておるわけではありますが、これを「仮(げ)」と呼びます。この世の中は空ではありますが、実際は主観的・感性的に「仮」を実感として生きている。この愛すべき仮は、五感に訴えてきて、十分に魅惑的である。

しかし、ここに埋没するとき、すなわち、執着するとき、さまざまな煩悩な沸き起こり冷静・平穩を保つことができない。さて、どう折り合いをつけるか。

これが「中」の立場であります。

空仮中は、円融三諦といい、天台思想の体系づけの基底となるものですが、今回はこの「中」について説明いたします。